

「豊子愷『護生画集』解題（2）——心の自由を求めて」

大野 公 賀

はじめに

豊子愷（ほうしがい一八九八—一九七五）は一九二〇年代から、「子愷漫画」と称される独自のイラストや、『縁縁堂隨筆』に代表される格調高い散文で、中華民国期の新興市民階級を中心に人気を博した芸術家である。豊はその他にも、芸術教育に関する著述や翻訳を多数著し、『源氏物語』や夏目漱石『草枕』などの翻訳を手がけ、また立達学園や開明書店の創設に関わるなど、多方面で活躍した。豊子愷はまた、晩清から民国初期の中国文芸界で活躍し、一九一八年に出家した高僧、弘一法師（俗名は李叔同、りしゅうどう一八八〇—一九四二）の芸術および仏教上の高弟としても知られている。

小論で取り上げる『護生画集』は、豊子愷が弘一法師の発案の下に、一九二九年から七三年まで四〇年以上の年月をかけて完成させた絵解き啓蒙書で、全六集、計四五〇幅の絵と題詞から成る。その存在自体は、中国内外の研究者はもとより、中国や台湾、香港など中国語文化圏の一般読者にも広く知られている。しかし、全六集の完成に

至るまでの経緯や内容など、詳細については、これまでほとんど論じられていない。

豊子愷と弘一法師が『護生画集』の作成を計画したのは、豊が弘一法師によって仏教帰依式を受けた一九二七年当時のことで、当初は弘一法師の五〇歳を記念して一集のみ作成する予定であった。しかし、弘一法師から自分が何歳で亡くなるうとも、百歳に相当する年までは一〇年毎に『護生画集』を発行し、各集の収録作品数を一〇幅ずつ増やすよう依頼され、豊子愷は戦時中や文化大革命（以下、文革）期にも作成を続け、全三六集を完成させた。『護生画集』は作成が長期に及んだため、テーマも関係者も集によって異なっている。

小論は「豊子愷『護生画集』解題（１）」の続編であり、全三六集のうち中華人民共和国の成立（以下、建国）後に作成された第四集から第六集について、作成の意図や経緯、社会的反響について論じる。⁽²⁾

上述のように、豊子愷は文革期にも『護生画集』の作成を続けた。建国後、豊子愷は本人の思惑とは裏腹に、中国美術家協会常務理事や中国对外文化協会上海分会副会長などの要職に任じられ、文革期には多くの知識人と同様に批判攻撃の対象とされ、市内引き回しや郊外への下放と肉体労働、紅衛兵による暴行などを余儀なくされた。作品は社会に害を与える「毒草」であるとされ、すべての創作活動を禁じられた。

当時、豊子愷の主要な罪状とされたのは、民国期および百花齊放・百家争鳴期（一九五六一—一九五七）の作品や活動に見られる個人主義や閑適主義、そして生涯を通じての仏教信仰である。紅衛兵による突然の襲撃や家宅搜索が日常的に行われていた中、仏教および儒教的要素の強い『護生画集』の作成を続けることは、豊子愷本人のみならず、家族の命にも関わる危険な行為であった。

豊はなぜ、それ程までして『護生画集』を作成しなければならなかったのだろうか。小論では、新中国において

毛沢東の「文芸講話」路線が文学、芸術に対する国家的指導方針として確立していく中、それに全面的に反する『護生画集』を作成する過程で、豊子愷が何を考え、どう行動したかを明らかにする。それによって、「文芸講話」路線における、当時の知識人の一つのありようをも示すことが出来るのではないかと思う。

一・『護生画集』第四集（一九六〇年作成）

(一) 作成経緯

『護生画集』第四集は、一九六一年初頭にシンガポールで出版された。同集の序文には、出版責任者である広治法師（一九〇〇—一九九四）⁽³⁾の名前で、作成経緯に関する説明が記されている。しかし、この序文は実は、豊子愷がある意図をもって起草したもので、実際の経緯とは大きく異なっている。豊子愷は何故そのような形で、虚偽の説明をしなければならなかったのだろうか。本節では広治法師宛ての豊子愷の書簡を中心に、建国後の豊の状況や実際の作成経緯などについて見てみたい。

まず建国後の豊子愷であるが、他の多くの作家や芸術家と同様に、創作活動の比重が著しく減少し、多くの時を日本語やロシア語の翻訳に費やすようになった。⁽⁴⁾

豊子愷は一九五一年五月に友人の夏宗禹に宛てた書簡で、自分はもはや絵にも文学にも興味がなく、現在の中国に最も必要なのはソ連の文化と音楽なので、今後はロシア文学と音楽を専門にし、老後は「人民に奉仕したい」と記している。この書簡で、豊はまた、同年三月二五日付『人民日報』に掲載された、王朝聞の「我々には児童を描いた絵が必要である——『子愷画集』再読所感」について言及し、「彼らは今までに二回手紙を寄越し、絵を新聞に投稿するように依頼してきたが、すべて謝絶した。（中略）私は絶対に絵を描かない」とも述べている。⁽⁵⁾

豊子愷がこれ程まで頑なに創作活動を拒んだ理由を考えるにあたり、豊が建国初期に「左派人士」から受けた批判を紹介したい。豊子愷は、一人の人間が一群の羊を連れて歩く絵に対して、実際には先頭の羊一匹だけを連れて歩けば、他の羊は自然とついてくるので、その絵は事実を描いていないと批評したことがある。それに対して「左派人士」らは、豊子愷のこの発言は、暗に「我々に共産党の指導は不要である」と述べているのだとして、豊を激しく批判したという。⁽⁶⁾

豊子愷は当時、極めて少数の随筆と漫画を発表しているが、そのほとんどが共産党や新中国を賛美する内容である。一九三〇年代、豊は旧中国の悪弊を諷刺する作品を大量に描いたが、建国後の作品の中には同じテーマで新中国を理想的に描き、新旧二作を対照的に表示する「今昔シリーズ」がある。戦前に、上海の孤児「三毛」さんまおを主人公にした漫画で人気を博した張楽平にも、同様な「今昔シリーズ」がある。豊子愷や張楽平の描く新中国は、いずれも現実のそれとは大いに異なっており、これらの作品が当局からの指示に基づき、大衆への宣伝意図をもって描かれたものであろうことは想像に難くない。⁽⁷⁾

一九五六年六月、中共中央宣伝部長の陸定一による「百花齊放、百家争鳴（以下、双百）」の提唱後、中国文芸界は一時的に自由化の傾向を見せた。この時期、豊子愷も双百の精神「多様統一（多様性があり、統一性がある）」を評価し、建国以前の中国文化界は「多様而不統一（多様性はあるが、統一性がない）」状態で、建国直後は「統一而不多様（統一性はあるが、多様性はない）」状態であったと批判した。⁽⁸⁾

双百の反動から、翌五七年六月には反右派闘争が展開され、豊子愷を含む、多くの作家が批判された。そのため、反右派闘争の頃から、豊子愷の言動は以前よりも慎重なものになり、広洽法師を通じてのシンガポールからの書画の依頼にも、政治思想的に問題のないものだけに制限している。⁽⁹⁾

この頃から、国家による宗教の管理、統制も嚴重なものになっていった。豊子愷が広洽法師に宛てた書簡から、当時の中国仏教界の様子を見てみたい。一九四九年の中国人民政治協商会議共同綱要や一九五四年制定の憲法によって、建国当初は宗教信仰の自由が保障されていた。豊子愷の一九五五年六月の書簡にも、杭州や上海の名刹が政府によって修築されたと記されている。⁽¹⁰⁾

しかし、一九五五年秋以降の書簡では、国内の僧侶のほとんどが政治学習や会議への参加を強制され、寺院で修行する者は非常に減少したと述べられている。⁽¹¹⁾この頃から始まった宗教界への干渉は次第に深刻化し、信教の自由は大躍進以降、さらに侵害されていくのである。⁽¹²⁾

こうした状況下、豊子愷は広洽法師に宛てた一九六〇年八月の書簡で、『護生画集』第四集を作成する意図はあるが、出版が困難なので延期せざるを得ないとして、その原因は甚だ複雑なので詳述しないが、了承して欲しいと述べている。⁽¹³⁾当時の国内情勢から推察するに、その理由として当時の宗教および文芸に対する干渉や統制、印刷出版のための用紙や費用の不足などが考えられる。一九六一年四月の豊子愷の書簡にも、国内では紙不足がひどく、政治に関する書籍以外の重版は極めて稀だと記されている。⁽¹⁴⁾

また、その他の要因としては、当時の豊子愷の政治的立場も考えられる。豊子愷は、一九四九年七月に中華全国文芸界代表大会の代表に選ばれて以来、上海市文芸代表として、政治への参加を余儀なくされた。対外的役職も増え、一九五三年には上海市文史研究館の館務委員、五四年には中国美術家協会常務理事および上海美術家協会副主席、五七年には上海市政治協商委員および上海市外国文学言語学会理事に選出された。一九五八年には第三回全国政治協商会議委員となり、翌二年間は北京での全国会議にも出席している。また一九六〇年六、七月には上海中国画院院長、中国对外文化協会上海分会副会長に任命された。

前述のように、豊子愷は一九六〇年八月の書簡で、『護生画集』第四集作成の困難さを訴えたが、同年九月の書簡には『護生画集』第四集の題詞を上海在住の居士、朱幼蘭に書いてもらうように決定した旨と、同集に対する広洽法師の協力への感謝の意が述べられている。¹⁶以上から、『護生画集』第四集は、豊子愷の主導で一九六〇年秋に作成が開始され、広洽法師の支持と援助によって、シンガポールで出版されたと考えられる。

しかし、第四集の作成経緯について、本節冒頭で述べた広洽法師の序文には、『護生画集』第三集を作成していた一九四八年当時、豊子愷は人生の無常と政情の不安を危惧し、広洽法師に対して、これから第四集の絵を作成して、随時シンガポールに送るので、代わりに保管してほしいと依頼して来た」と記されている。同序文にはまた、弘一法師の生誕八〇周年の一九六〇年に、それまで豊子愷が送付してきた絵を数えると丁度八〇枚あったので、『護生画集』第四集を作成したとも記されている。¹⁷

この序文は、広洽法師の名前で発表されているが、起草者は豊子愷である。その意図は、『護生画集』第四集の出版の主導者は豊子愷ではなく、広洽法師であると人々に認識させることにあった。豊子愷は広洽法師に宛てた書簡でも、対外的には同集は自分ではなく、広洽法師が主導的に作成したと述べてほしいと依頼している。¹⁸その理由について、豊子愷は「自分は国内の文化教育の仕事に責務があり、当然ながら、まず社会主義の革命、建設に関する書物を著述すべきであって、『護生画集』を優先して、しかも海外で出版したりすべきではない」¹⁹からだと述べている。

『護生画集』第四集を、海外在住の広洽法師の主導によると見せかけたのは、前述のように国内の文芸および仏教への統制が深刻化する中、文芸界代表として数々の役職に就いていた豊子愷の言わば苦肉の策であった。

(二) 「獣面人心」と「人面獸心」

『護生画集』全五六集の根底を流れるのは、豊子愷が中国社会に一貫して提唱し続けた「護心思想」である。「護心思想」とは、すべての事象は心が編み出すものであり、そうである以上、人は心を正しく護持すべきであるという考えである。

以下、それに加えて『護生画集』第四集の特徴について考察する。まず題材に関して、次の二つの特徴が挙げられる。第一は全八〇篇のうち七六篇が動植物の話であること、第二は豊子愷の自作の詩が一篇も含まれていないことである。豊は題材について、多くは古書から採用したもので、神秘的で不可思議な内容も含まれているが、重要な命あるものを愛おしむ心であって、内容が事実であるか否かには拘泥しないで欲しいと述べている。⁽²⁰⁾

第四集では動植物への愛情を題材に、慈悲仁愛の心の重要性および万物共存への願いが表現された作品が多い。これは上述の「護心思想」に基づくもので、これまでの三集すべてに共通する内容である。第四集に特徴的なのは、これまでのような「人心を有する動物(獣面人心)」だけではなく、「獸心を有する人間(人面獸心)」をも題材にしている点である。

一例として、「四一四〇 捨身追盜」を見てみたい。この逸話では、程という名の長官の家に強盜が押し入った際に、切り殺されても強盜を銜えて逃さなかった飼犬と、長官を裏切った下僕が対照的に描かれている。世の人々は皆、「程長官の家には奇異なものが二つある。一つは人面獸心で、もう一つは獸面人心だ」と話したという。⁽²¹⁾

豊はまた「四一七二 酷刑」では、驢馬をおいしく食べるために、生きたままその肉を割く料理屋の話を題材に、人間は自己の欲望を満たすために、果たしてどこまで残忍になれるのかと、人々に問いかけているのである。⁽²²⁾

第四集のこうした「人面獸心」を題材とした作品は、何を目的に作成されたのだろうか。同集後記で豊子愷は、

それは世の人々が「食欲を貪り、妄りに殺戮をしないように」との願いからだと述べている。⁽²³⁾ 換言するならば、それは人間が自己の欲望のためだけに、それ以外の一切を顧みることなく、利己的な行動をとることへの戒めである。これは人類に対する普遍的なメッセージであるが、同時にまた当時の中国社会への強烈な警告でもあった。

二．『護生画集』第五集（一九六五年作成）

（一）作成経緯

『護生画集』第五集は一九六五年秋、第四集と同じく広洽法師の支援の下にシンガポールで出版された。同集は本来ならば、弘一法師の生誕九〇周年にあたる一九七〇年に出版されるべきである。それが五年も早く出版されたのは、『護生画集』が未完に終わることを広洽法師や中国内外の仏教徒、そして誰よりも豊子愷自身が恐れたからである。その理由としては、当時の豊子愷の健康状態や中国の国内情勢などが考えられる。本節では、『護生画集』第五集作成時の豊子愷をめぐる状況など、第五集の出版経緯について述べる。

一九六四年九月、豊子愷は広洽法師への書簡で『護生画集』第五集を一九七〇年以前に作成する意思を伝えた。この段階で、豊は既に第五集の構想をたてており、また題詞の書写は北京在住の仏教学者、虞愚（一九〇九—一九八九）⁽²⁴⁾が担当することも決まっていた。⁽²⁵⁾

一九六五年六月、豊子愷は題詞の原稿を完成させ、北京の虞愚に送付した。⁽²⁶⁾ 七月からは、絵の作成を開始し、八月には完成した絵と題詞を広洽法師に送付した。⁽²⁸⁾ 尚、同集は香港で印刷され、うち約九〇冊を豊子愷が受け取り、残りはずべて広洽法師に寄送した。⁽²⁹⁾ 豊子愷は第五集の作成当初から、香港での印刷を提案していたが、それは印刷業界への制限が上海では非常に厳しかったためである。⁽³⁰⁾ 一九六〇年以降、中国では出版物に対する検閲が強化さ

れ、印刷物資も著しく不足していた。

また、豊子愷が『護生画集』の作成を急いだ理由の一つに、当時の豊の健康状態がある。一九五四年に肺病と胸膜炎で入院して以来、豊子愷の健康状態は基本的に優れず、気管支炎や低血圧、神経痛などに苦しめられていた。広洽法師はこれを気遣い、しばしば外国製の薬品や栄養補助食品などを送り届けた。特に低血圧と貧血がひどく、豊は時に眩暈や、筆を持ってない程の指の震えにも悩まされていた。⁽³¹⁾

次に、豊子愷が当時おかれていた政治的立場について述べたい。前述のように、反右派闘争後には出版物に対する全面的な検閲や統制が始まり、豊の言動も慎重なものとなった。しかし、一九六〇年の冬以降、経済調整期に入ると、文芸学術界にも再び比較的自由な雰囲気が生じた。その傾向は、一九六二年四月に中共中央宣伝部が国家主席の劉少奇の名前で「文芸八条」を下達すると、さらに強まった。同第一条では双百方針の貫徹と執行が宣言されている。

このような状況下、豊子愷は一九六二年五月の上海市第二次文学芸術工作者代表大会で、双百について「その花がよい香りの花で、咲くべき花だと認めたのならば、花自身に成長させるのが一番よい。その花が成長するのを手伝うべきではなく、干渉すべきではない」と述べた。豊は続けて、盆栽と垣根の剪定を例に、強制的に型に合はめることや、すべてを一律化しようとする動きに抗議の意を表した。⁽³²⁾ これらの発言が、文革期には自らに対する攻撃要因になるうとは、当時の豊には予期だにせぬことであった。

同年八月、豊子愷はまた、飼い猫を題材に随筆「阿咪」を書いた。この作品は発表当時、毛沢東を攻撃する「毒草」であるとされた。それは、作中の猫(阿咪)の綽名「猫伯伯(Mao bobe)」が、毛沢東に対する敬称「毛伯伯(Mao bobe)」に通じることから、毛沢東に対する「影射(あてこすり)」とされたためである。⁽³³⁾ 当時は出版社内での

「消毒」だけで収まり、その後の豊子愷の活動に影響を及ぼすことはなかった。しかし、これもまた文革期には豊に対する批判攻撃の重大要因となった。

しかし、この作品には実はそれ以上に、共産党の文芸政策に対する豊子愷の批判と抗議が示唆されている。この作品で豊は、前から愛猫を題材に文章を書きたかったのだが、そのような文章は「世間の道理にも人の感情にも無益」なので執筆を諦めていた。しかし、今回は「向こう見ずにも筆を執って、世間や他人には構わないことにした」と述べ、さらに「たとえ鼠をとらない猫でも人生に功績がある。それならば私が今、猫のことを書いても、おそらく非難を受けることはないだろう」と記している⁽³⁴⁾。

これは、文学や芸術を政策宣伝のための道具と考える共産党への真正面からの反論である。当時、豊子愷がこのような文章を書けたのは、文芸界に「文芸八条」に象徴されるような自由な雰囲気があったからである。そして、さらに言うならば、反右派闘争での批判を経た後に尚、これ程までに強烈な抗議文が書けたのは、豊子愷の抵抗精神が何者にも侵されることなく、従前どおり保たれていたからである。

その後も文芸界は、一九六三年一二月に毛沢東が整風を指示するまでは、比較的自由な状態にあった。しかし、翌六四年の春には、文化革命五人小組が組織されるなど、状況は徐々に変化していった。上海文芸界の代表的な立場にあり、それまでも何度か批判を受けていた豊子愷は無論、早くからこうした変化に気付いていたであろう。国内の政治的状况に関して、豊子愷は広洽法師には何も伝えていない。しかし、広洽法師は一九六五年冬に一ヶ月程、中国に帰国しており、その際に状況を把握した事であろう。こうした状況下、豊子愷と広洽法師が『護生画集』第五集の作成を急いだのも当然のことであった。

(二) 中国共産党に対する批判と抗議

『護生画集』第五集でも、これまでの四集と同様に、衆生平等とそれに基づく放生戒殺、動物にまつわる不思議な話などを題材に、生命や自然への賛美、万物に内在する仏性への敬意、そしてそれと相反する人間の傲慢さや残酷さへの批判が表現されている。第五集の特徴としては、共産党への批判と抗議をテーマとした作品が挙げられる。特に、第八八幅から第九〇幅までの最後の三幅では、それらに配された豊子愷の題詞のあまりに直接的な表現に驚かされる。

まず「五八八 大魚啖小魚 小魚啖蝦蛆」では、この世のすべての生物は不公平で、弱肉強食の状態に置かれているとして、さらに「苛酷な政治の恐ろしさは、刀よりもひどい。禽獣に思いを及ばせながら、人を顧みぬことがあるか」と述べている。⁽³⁵⁾ また「五八九 月子彎彎照九州 我家歡笑万家愁」でも、豊子愷はこの世は不平等な弱肉強食の世界で、遙か遠くから聞こえてくるのは悲嘆と、不公平に対する怒りや不満の声だと述べている。豊は続けて、この世の貧富と苦楽の差は激しく、水火の苦しみがあふれていると述べ、「大宝筏（仏法）」で衆生をこの煩惱の世界から救い出し、彼岸に送り届けたいと言う。⁽³⁶⁾ これら二篇から、当時の中国で頻繁に見られた、特権階級による搾取と不平等、政治的統制と肅清、そしてその根幹にある中国共産党の腐敗に対する豊子愷の強い怒りと抗議がうかがわれる。

次に、第五集の最終篇「五九〇 延年益寿」では、長寿の象徴である鶴と松が描かれている。そこに配された豊子愷の詩には「生あるものは必ず死す。誰が不死を得られようか。未だ死せざる時には殺生を加えるなかれ。自ら生まれ、自ら死すのは、天地の常である。万物がその寿命を全うするのは、繁栄した平和な世の喜びである」と謳われている。⁽³⁷⁾

この詩からは、生あるすべての物は天から与えられた生を全うすべきであり、何人もそれを遮ってはならないという、豊子愷の強い主張が感じられる。この背景には、豊子愷の生命に対する畏敬の念、そしてすべての生物には皆、天との平等な生きる義務と権利があるという思想が存在する。これは、清代以降の「自他相互の生存を認めあう、いわば生存権を内包した相互関係的な仁」を連想させる。例えば、同時代の戴震は「自分の生を遂げようとする」と同時に人にその生を遂げさせるのが仁である」と述べている。「五九〇 延年益寿」の豊子愷の題詞の内容は、この清代以降の「仁」思想の流れを汲むものである。

「仁」という思想、それ自体は清代以前から存在するものである。しかし、清代以降は従来の「仁」思想に加えて、「生存欲と生存欲の間の対立を相互に調和させようとする一種の社会調和原理が伏在」するようになった。それは、明末清初以降の中国社会において、生存欲や私有欲が普遍的に主張されるようになったためである。⁽³⁸⁾

豊子愷が『護生画集』第五集の最終篇において、生存権を含んだ「仁」を提唱したのも、当時、人間の際限なき生存欲と私有欲を目の当たりにしたからと言えるのではないだろうか。豊子愷は第五集の最終篇で、生存を含む、すべての個人の自由と権利は尊重されるべきであり、それを権力で蹂躪するのは人間として許されざる行為だと主張するのである。

三．『護生画集』第六集（一九七三年作成）

（一）作成経緯

『護生画集』最終集の第六集は、第五集出版から一四年後の一九七九年に香港で出版された。この間、中国では文革が起こり、海外との連絡も途絶えがちとなった。豊子愷も批判攻撃の対象とされ、作品は「毒草」「黒画」と

して、他人への販売や譲渡は無論のこと、作成自体が禁止された。豊子愷は上海近郊の農村への下放の後、一九七二年末には一時「解放」されるが、翌年には再び批判対象とされ、正式な名誉回復を受けないまま、一九七五年に肺癌により死去した⁽³⁹⁾。

このような状況下、豊子愷は『護生画集』第六集をいつ、どのようにして作成したのだろうか。娘の豊一吟によると、第六集は一九七三年に作成され、題詞の書写を担当した朱幼蘭が保管していた。その後、豊子愷の納骨儀式に参列するために、一九七九年に一時帰国した広洽法師がシンガポールへ持ち帰り、香港で出版した⁽⁴⁰⁾。

豊子愷が広洽法師や息子の豊新枚に宛てた書簡には、同集に関する記述はほとんどなく、正確な作成状況は現段階では不明である。それらの書簡によると、豊子愷は一九七一年六月頃から『大乘起信論新釈』という日本語の仏教解釈書の翻訳を秘密裏に行い、一九七二年末には一時帰国中のシンガポール華僑に託して、その完成原稿を広洽法師に渡している。もしも、この時期までに『護生画集』第六集も完成していたならば、豊は恐らくそれも共に渡していたであろう。したがって、『護生画集』の作成はこれ以降と考えられる。本節では、文革期の豊子愷の状況をまじえながら、『護生画集』第六集の作成経緯について論じる。

これまで述べてきたように、豊子愷の発言や作品は文革以前から既に何度か批判を受けていた。このような批判は、『護生画集』にも及んでいる。例えば、豊子愷は一九六六年初頭に、『護生画集』は「四害除去運動⁽⁴¹⁾」に反するとの理由から、人に寄贈しないようにとの忠告を受けている。前述のように、香港で印刷した『護生画集』第五集のうち、豊子愷は約九〇冊を受け取り、残りは広洽法師がシンガポールで保管していた。それは、実はこの忠告が原因であった。しかし豊子愷は当時、事態をまだそれ程、深刻に受けとめてはおらず、九〇冊程度を家に残しておいて、友人や知人に配っても別に問題はあるまいと考えていた⁽⁴²⁾。

しかし、文革の進展とともに事態は急展開した。宗教に対する批判や攻撃は激しさを増し、宗教施設は破壊され、宗教活動はすべて禁止された⁽⁴³⁾。仏教も例外ではなかった。大躍進以降、寺院は閉鎖され、東南アジアからの外賓に対する仏教儀式を除いては、一般の中国人に対する葬儀も含めて、すべて禁止された⁽⁴⁴⁾。このような状況下、『護生画集』も危険書籍とされた⁽⁴⁵⁾。そのため、豊子愷は当局による書簡の検閲を前提とした上で、『護生画集』について、広洽法師に故意に虚偽の書簡を送り、『護生画集』第五集の絵は二〇年前に送ったもので、内容的に現在とは相容れないので、原稿は保存しないでほしいと依頼している⁽⁴⁶⁾。

文革期には、豊子愷は上海市の十大重点批判闘争対象の一人とされ、「反動學術權威」「反革命黑画家」「反共老手」「漏網大右派」などのレッテルを貼られた。その主たる批判理由は、豊子愷の漫画や随筆が、共産党の政策や毛沢東の革命文芸路線を暗に批判しているというものであった。

例えば、一九六〇年に描かれたイラスト「船里看春景」は、三面紅旗への批判であると見なされた。この作品は、人々が船中から春景色を楽しむ様子を描いたもので、水面には川沿いの桃花が映っている。この桃の木の枝が三本であり、またその近くに「人民公社は素晴らしい」という看板が描かれていたため、豊は人民公社を水中に映った桃花のような空虚な存在と見なしていると批判された⁽⁴⁷⁾。また、前述の愛猫「猫伯伯」についての随筆は、毛沢東を攻撃する「大毒草」であるとされた。客観的には決して「影射（あてこすり）」とは思えないような作品が次々と「影射」であるとされ、批判攻撃の理由となった⁽⁴⁸⁾。その他には、戦前や戦時下に作成した反戦論的作品や『護生画集』などが罪状とされた⁽⁴⁹⁾。

当時、豊子愷は中国画院院長の職にあつたため、文革直後は主として画院で審査などを受けた。一九六七年からは、画院の「牛棚（軟禁室）」に閉じ込められ、批判対象の中心人物として激しい攻撃にさらされた。同夏には、

豊子愷だけを集中的に批判攻撃するための大会が開かれ、豊の罪状だけを連ねた冊子も出版された。⁽⁵⁰⁾

他の知識人と同じく、自宅は紅衛兵によって搜索、占拠され、金品や絵画、書籍、電化製品などが没収された。また、一九六九年秋から冬にかけては、上海市郊外の港口曹行人人民公社大隊に下放された。⁽⁵¹⁾一九六九年には社会も少し落ち着きを取り戻し、「解放」される知識人も増えてきた。しかし、豊子愷は巴金や周信芳と並んで、張春橋による三大攻撃対象のままであった。⁽⁵²⁾画院の未解放者からは自殺者も現れ、豊子愷についても自殺の噂が流れたという。⁽⁵³⁾

このような苛酷な状況にも関わらず、豊子愷は比較的早い時期から達観の境地に到達していたようである。豊一吟の回想によると、文革開始直後は豊子愷も状況が理解できず、闘争集会の後には、常にかなり緊迫した表情であった。しかし、豊子愷はある日を境に大きく変貌を遂げる。その様子を、豊一吟は次のように記憶している。

ある日の昼、帰宅した父の顔は異常な憂いに満ちていた。数十年來、父は食事の際には必ずお酒を飲んでいて、それが禁じられて既にもう何日も過ぎていた。この日、父は食卓に座っても一言も話さなかった。私は父にご飯を運んだが、父はそれをわきに押しやると、いつになくお酒を求めた。母は事が起こるのを恐れ、私に少なめに注がせた。父はコップを持ち上げると、眉を顰め、長い時間の後、突然またお酒を止め、箸を投げた。(中略)「奴らは、私が反党反社会主義だと、無理にも認めさせようとしている。もしそれを認めなければ、大規模な群集大会を開いて、批判攻撃すると言うのだ。……私は本当に党を熱愛し、新中国を熱愛し、社会主義を熱愛しているのにーだが、奴らは私が愛することを許さないのだ……」父は嗚咽し、話を続けることが出来なかった。(中略)これ以降、父は意を決したようである。一切を冷静に傍観し、泰然自若としていた。どれ程までに無情な批判闘争にも、またどれ程までに残酷な試練にも、父は二度と心を動かされはし

なかつた。⁽⁵⁴⁾

これ以降、豊子愷にとつて「牛小屋」は「参禅」の場に、そして批判闘争は「演技」となつた。夜の黄浦江での引き回しは「浦江夜遊」であり、「牛小屋」に呼び出されるのは手洗いに立つようなものであつた。上海美術学校に監禁された時には、リュウマチ治療のための薬と称して家族にお酒を運ばせ、仲間と共に楽しんだといふ。⁽⁵⁵⁾ 豊子愷は一貫して、常にこのような態度を保つていた。

当時、豊子愷の心を支えたのは、河北省石家荘に住む息子の豊新枚との文通と、早朝のわずかな自由時間であつた。一九六六年になると、豊はこの自由な時間を利用して「地下活動」を開始した。一九六九年には農村に下放されたため一時的に中断されたが、翌年に中毒性肺炎と肺結核の入院治療を理由に上海市内に戻ることが出来た。退院後、自宅療養が許されると、豊は早速「地下活動」を再開した。

一九七一年には、「地下活動」の時間を利用して、人生最後の画集『敵箒自珍』と随筆集『縁縁堂続筆』⁽⁵⁶⁾の作成を開始した。『敵箒自珍』に収められたのは、文革中に失われ、一九七一年の「地下活動」中に描きなおした作品である。中には、「影射」を理由に批判された「黒画」も幾枚が含まれている。宗の張良臣の句「昨日豆花棚下過 忽然迎面好風吹 独自立多時」に題材をとつた絵は、その一例である。⁽⁵⁷⁾ この絵は、句の中の「好風」という言葉が、蒋介石の大陸反撃への歓迎を意味するとして、文革初期に攻撃された。

この画集の題名『敵箒自珍』とは、「たとえ質が悪くても、自分の物は良く見える」という意味である。このよ
うな題名をつけた理由として、豊子愷は「甚だ倉卒だが、筆力はむしろ昔に勝る」からだと言つてゐる。⁽⁵⁸⁾ この画集に、文革初期に「黒画」として批判された作品を複数収めてゐることを考えると、たとえ当局が自分の絵を「黒画」と認定しても、自分が当局の権威を認めない以上、その批判は少しも意に介さないう、豊子愷の抵抗精神

がうかがわれる。

豊子愷は最後の画集と随筆集を完成した後、前述のように日本語の仏教解釈書『大乘起信論新釈』の翻訳にとりかかった。同書は、インドの馬鳴菩薩の『大乘起信論』を日本人仏教学者の湯次ゆきりょうえい了りょう栄えいが翻訳したものである。⁽⁵⁹⁾豊子愷の仏教信仰を考える際、同書は重要な意味をもつ。従来、豊子愷は弘一法師の影響で仏教徒になったと考えられてきた。しかし、豊子愷は息子宛ての書簡で、若い時に『大乘起信論新釈』を読んで感動し、仏教を信じるようになったと述べているのである。⁽⁶⁰⁾

一九七一年六月、豊子愷は同書を全訳し、広洽法師に依頼して匿名で出版することを決意した。これ以降、同書の翻訳が豊子愷の「地下活動」の中心となった。文革当時、宗教活動は全面的に禁止されており、自宅療養中とは言え、依然として重点批判攻撃対象であった豊子愷にとって、仏教書の翻訳は絵や随筆の創作以上に危険な行為であった。それは豊子愷自身も十分に承知しており、息子にもこの翻訳の話は二人だけの秘密なので、家族も含めて絶対に他言せぬよう、また豊子愷からの書簡は破棄するよう、度々指示を与えている。⁽⁶¹⁾

翻訳開始から約一カ月後には、豊は朱幼蘭にも翻訳の件を知らせ、その協力を仰いでいる。前述のように、朱幼蘭は『護生画集』第四集の題詞を書写しているが、第六集の書写も朱幼蘭による。尚、豊子愷は一九七一年一月の広洽法師への書簡で『護生画集』第六集のことは常に気がかりではあるが、将来も完成できるかどうかからないと伝えている。⁽⁶²⁾第六集の作成の話が現実化するのには、朱幼蘭がこの『大乘起信論新釈』の翻訳に関して、豊子愷を頻繁に訪問するようになった、一九七一年の夏以降と考えられる。

一九七二年末、豊子愷は『大乘起信論新釈』の翻訳を完成させ、シンガポールから一時帰国した華僑の周穎南に託して、広洽法師に届けてもらった。周南穎は当時を回想し、このような宗教的色彩の強い翻訳原稿を預かること

はそれ自体、問題が生ずる可能性があったと述べている。⁽⁶³⁾

その後、豊子愷は一九七二年末に画院から「審査」の終了と「解放」を告げられた⁽⁶⁴⁾。豊子愷の考えも少し楽観的なものとなったのか、翌年八月には広洽法師に書簡を送り、中国では「宗教への信仰は自由ですが、宣伝はしてはなりません。私は今、非公式に海外で宣伝活動をするのですから、どうしても名前を出すことは出来ません。このような訳ですので、〃無名氏〃の名を用いることに致します」と述べている。豊子愷は続けて、以上のような理由から自分は序文を書けないが、他の人が序文で、この「無名氏」が誰かを明らかにしても構わないと述べ、また出版後には朱幼蘭と自分用に二冊送ってくれるように依頼している。⁽⁶⁵⁾

これは、一九七一年九月の林彪のクーデター失敗以降、周恩来を中心に社会秩序の再建が図られたことと無関係ではない。豊子愷ら文芸関係者の立場は、まさに周恩来ら実務派の動向に左右されていたのである。四人組ら文革派は周恩来攻撃の一環として、一九七三年九月末頃より批林批孔運動を展開するが、このような情勢の変化は、豊子愷の立場にも微妙に影響を及ぼした。

一九七三年一二月、豊子愷は再び広洽法師に書簡を送り、『大乘起信論新釈』の原稿は「二〇数年前の旧訳です。今、法師が海外で出版するにあたり、私の姓名は出さずに、〃無名氏〃とお書きくださるようお願い致します。また発行範囲は宗教界に限定し、新聞で宣伝をなさらないでください。追伸 中国国内ではこのような唯心主義を宣伝する書物は必要ありませんので、出版後にはどうか、ご送付なきよう、お願い申し上げます」と依頼している。⁽⁶⁶⁾これは、〃無名氏〃の正体を明らかにしても構わないと述べた上述の書簡から、わずか四ヶ月後のことである。⁽⁶⁷⁾

豊子愷は周穎南にも、同様の旨を依頼している。⁽⁶⁷⁾ 現段階では、豊子愷が『護生画集』第六集を作成したのが、

一九七三年のいつ頃なのか確定できない。しかし、それは恐らく『大乘起信論新釈』の翻訳の完成と、「解放」という二重の喜びに満ちた一九七二年末から、状況が再び悪化するこの時期までの間と推察される。

一九七四年二月には各地で「黒画展覧会」が開かれ、多くの画家が非難された。この意図もまた、周恩来を攻撃することにあつた。⁽⁶⁸⁾ 豊子愷も上海市委員会書記の徐景賢により批判対象とされたが、対象とされた作品も理由も従来と何ら変わりの無いものであつた。

この展覧会について豊子愷は、この種の「わざわざ粗探しをする」やり方は、文革初期には新鮮だったが、今ではみな飽きてしまい、お笑い種であると述べている。⁽⁶⁹⁾ この展覧会を見学した巴金も、豊子愷と同様な感想をいだいた。巴金は当時を回想して、その「黒画展覧会」によって、権力さえあればどんな道理も罷り通る現状と、自分の頭で考えることの重要性を改めて思い知らされたと記している。⁽⁷⁰⁾

その後も「文革の成果を強固にする」ための批判大会が開催され、豊子愷を含めた四人がその対象とされた。これ以降、豊子愷は一時、絵や書の寄贈を中止した。しかし、豊の書画を求める人は多く、豊も初めは毛沢東の詩を書写して贈っていたが、次第に絵も贈るようになった。

前述のように、豊子愷は書画の創作を禁止されていたが、それはそもそも何故だろうか。豊自身の言葉を借りるならば、文革中に当局によって「毒草」と認定された作品を再び創作することは「文化大革命の輝かしい成果の否定」に他ならないからである。⁽⁷¹⁾ 換言するならば、豊子愷が「地下活動」にこだわり、不意の家宅搜索を恐れる家族に何度懇願されても創作活動を止めなかったのは、正にそれが文革の否定であり、自己のこれまでの軌跡の肯定だったからである。

（二）人間の尊厳に対する信頼

本節では『護生画集』第六集の内容と特徴について述べる。まず題材は、百篇すべてが動物に関するものである。題材の出典は主として『動物鑑』という書籍で、これは文革中に書物を没収され『護生画集』の題材探しに困っていた豊子愷に朱幼蘭が提供したものである。⁽²⁾第六集には、出典として『動物鑑』ではなく、歴史書や逸話集などの名前が記されていることから、『動物鑑』は様々な古書に記された動物の美談を集めた書物と考えられる。

内容的にはほとんどが動物と動物、あるいは動物と人間の間の忠義や礼節、友情などである。また、放生を題材にしたものも数篇あるが、そのほとんどが怪異現象に恐れ驚き、慌てて放生するという内容である。

放生戒殺は『護生画集』全六集を通じて、しばしば題材とされてきた。しかし、『護生画集』第六集には、これまでの五集とは違う点がある。これまでは、放生や戒殺による功德に主眼が置かれていた。それに対して第六集では、人間以外の生命に対する畏れが表現されている。また、これまでの五集でも題材とされていた生命や自然、万物に内在する仏性などについては、第六集ではその傾向がさらに強まり、畏怖に近いものになっている。それは、人間の卑小さや愚かさや表裏をなすものである。

これまで見てきたように、『護生画集』の「護生」とは生物を護ることであるが、その目的は人間の心を護ることとあり、全集を通じて「護心思想」が説かれていた。第六集では百篇すべてが、人間以外の生き物の話である。しかも、話の重点は、その生き物の情に接した際の人間の心の動きではなく、生き物の情そのものに置かれている。これは、何を意味しているのだろうか。

豊子愷の描く「人間以上に人間らしい心」をもった動物は、「人ながらに、人心を喪失した人間」への批判に他ならない。『護生画集』第四集では、「人心を有する動物（獣面人心）」以外に、「獣心を有する人間（人面獣心）」も

題材とされていた。第六集には「人面獸心」的な話は含まれていない。豊子愷は現実の世界で、余りにも多くの「人面獸心」を見てしまったのかもしれない。『護生画集』の最終集には、動物の親子の情を扱った作品が多い。それは、文革期に政治的理由から親子の縁を切った人々や、肉親でありながら互いに互いを告発した人々、あるいはそのような状況への哀しみによるのであろうか。

豊子愷が、生命の危険を承知の上で、出版の当ても無い『護生画集』第六集を作成したのは何故だろうか。それは、豊が人間に怒りや哀しみを覚えながらも尚、一縷の期待をいだいていたからではないだろうか。文革という異常事態が終息し、人々が人間として本来の心を取り戻せば、『護生画集』の精神も理解されるであろう事を信じて、豊は第六集を作成したのであろう。

もし豊子愷が、人間に対して完全に絶望していたならば、『護生画集』の作成をそれ程までに重視することはなかっただろう。読んでもらうに値する人間が、もうこの世に存在しない以上、作成する必要もないからである。この意味において、『護生画集』第六集は、人間の尊厳に対する豊子愷の信頼の証とも言えよう。

おわりに 精神の自由をもとめて

文革期に豊子愷は自身への理不尽な批判や攻撃にも拘泥せず、危険を承知の上で『護生画集』第六集などの「地下活動」を続け、文革という異常事態に冷静かつ客観的に処した。豊のこのような達観的な処世姿勢は、当時、巴金ら多くの知識人が「独立思考」を放棄し、感情を麻痺させることで救われようとしたのとは対照的である。⁽⁷³⁾では、豊子愷のこのような態度は如何にして培われたのだろうか。

まず、当時の豊子愷の発言や書簡から、文革当時の豊の意識について明らかにしたい。豊子愷は息子の豊新枚に

贈った詩の中で、次のように述べている。⁽⁷⁴⁾

『賀新枚結婚』

衣食当須記 詩詞莫忘温

衣食に気をつけるべし 詩詞の復習をなおざりにする事なかれ

胸襟須广大 世事似浮雲

胸襟は広く大きくすべし 世事は浮雲の如し

『送新枚赴石家庄』⁽⁷⁶⁾

我有養生術 七十如年少

我、養生の術を有す 七〇にして若者の如し

汝今入世途 万事心欲小

汝は今、世に出る途上なり 万事に注意されたし

胸襟須寛広 達観以為宝

胸襟は広くすべし 達観をもつて宝となす

詩中多樂地 醉郷不知老

詩中に多くの楽しみあり 酔の境地に老いを知らず

以上の詩には、豊子愷の心の有り様を理解するための要点がいくつか示唆されている。それはまず「世事は浮雲の如し」と考え、胸襟を開くことであり、達観の境地に到達することである。豊子愷はまた「詩中多樂地 酔境不知老」と詠い、その秘訣は詩と酒にあるという。しかし、これは単に詩や酒で現実を紛らわせ、一時的に現実から逃避するというような意味ではない。豊子愷は「詩中」「酔の境地」に遊ぶことで、現実を超越しようとしたのである。豊子愷が如何なる環境においても、その思考の自由を保持し、現実を客観的かつ相対的に認識しえたのは、現実を超越し、達観的な精神の境地に到達していたからに他ならない。

豊子愷が詩と酒に求めた超越は、その永続性において、単なる現実逃避とは根本的に異なる。詩や酒による現実からの逃避はあくまでも一時的なものにすぎず、詩の世界を離れ、酔いが醒めれば、また現実に直面せざるをえない。しかし豊子愷のように、ひとたび現実を超越し、別の境地に到達してしまえば、現実世界で何事が起ころうと

も、自分の精神世界には何の影響も及ぼしえないのである。

文革期に豊子愷が「解放」の知らせを受けるのは、一九七二年一二月末のことである。それまでにも「解放」の噂は何度も流れたが、豊子愷は画院院長の他にも上海市美術協会主席や全国政治協商委員などを歴任していたため、その審査は中央に属し、決定も遅れた。豊子愷は当時、自由に行動する権利を剥奪されてはいた。しかし、豊子愷の精神の自由を奪うことは誰にも出来なかった。それは上述のように豊子愷が現実を超越し、現実とは別の世界を有していたからである。

早朝の「地下活動」は、行動を規制された豊子愷にとって、その精神の自由を実践しうる唯一の場であった。豊は「地下活動」のおかげで、「小さな建物にひっそりと暮らしていても、憂鬱では無⁽⁷⁷⁾く、また「幸いにも精神生活が豊か」なので、「解放」の噂が現れては消えても「十分に耐えられ」たのであった。⁽⁷⁸⁾

しかし、豊子愷が「解放」を待ち望んでいたのも事実である。豊子愷は行動の自由を取り戻し、第二の故郷である杭州と、豊新枚の住む石家庄を訪問する日を切望していた。⁽⁷⁹⁾ 長期の軟禁生活と肺病の影響で、「解放」直後、豊子愷の体力はかなり衰えていた。杭州と石家庄の訪問を目標に、七五歳の豊子愷は毎日走っては、脚力を鍛えていた。⁽⁸⁰⁾ 残念ながら石家庄の訪問は実現しなかったが、一九七三年三月には杭州、次いで一九七五年四月には故郷の石門湾を訪れることが出来た。豊子愷が肺癌により死去するのは、石門湾訪問からわずか五ヶ月後のことであった。

(1) 大野公賀「『護生画集』解題(1) 豊子愷の仏教帰依から第一集まで」『東洋文化研究所紀要』(東京大学東洋文化研究所) 第一六二冊、二〇一二年二月、一五三頁。

(2) 『護生画集』全六集のうち、中華民国期に作成された第一集から第三集の詳細および、豊子愷と弘一法師の経歴、豊子愷の

「護心思想」については、注（1）「『護生画集』 解題（1）」の他、併せて以下をご参照いただきたい。大野公賀『中華民国期の豊子愷 芸術と宗教の融合を求めて』汲古書院、二〇一三年。

（3） 広洽法師 福建省南安県出身。一九二二年に厦門の南普陀寺にて出家。一九二九年以降、弘一法師に師事し、一九三七年にシンガポールに移住。シンガポール仏教総会副主席、主席を歴任。

（4） 豊子愷が日本語を学んだのは浙江省立第一師範学校時代のことで、一九二二年には東京に一〇ヶ月程滞在している。ロシア語は、一九五〇年二月に中ソ友好同盟相互援助条約が締結された後、同年七月より学習を始めた。豊子愷にロシア語の翻訳を勧めたのは、豊の古くからの友人で、建国直後に人民教育出版社社長に就任した葉聖陶である。豊一吟他「豊子愷伝」浙江人民出版社、一九八三年、一四二頁。

（5） 豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』第七卷、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九六年、四二四―四二五頁（以下、『豊文集』巻数、頁数と表示する）。

（6） 方堅「風雨憶故人 豊子愷先生在 文革 中」、鐘桂松等編『写意豊子愷』浙江文芸出版社、一九九八年、二二二頁。

（7） 「今昔シリーズ」には、例えば次のような作品がある。豊子愷「児童的今昔」、豊珍宝等編『豊子愷漫画全集』第八卷、二〇〇一年、京華出版社、第二卷八三頁。張楽平「三毛今昔」、姜維朴編『張楽平漫画全集』中国連環画出版社、一九九五年、四七四頁。

尚、豊珍宝等編『豊子愷漫画全集』（京華出版社）には、全一一卷（一九九九年）と全九卷（二〇〇一年）の二種類がある（以下、『豊漫画全集』巻数、年度、頁数と表示する）。

（8） 『豊文集』第六卷、四二―四三頁。

（9） 同上、第七卷、二四六頁（一九六〇年八月三日「致広洽法師 五九」）。

（10） 同上、二〇七頁（一九五五年六月六日「致広洽法師 一三三」）。

（11） 同上、二〇九・二一一頁（一九五五年九月一日、一九五六年九月一九日「致広洽法師 二五・二七」）。

（12） 末木文美士・曹章祺『現代中国の仏教』平河出版社、一九九六年、四六頁。

- (13) 『豊文集』第七巻、二四五―二四六頁(一九六〇年八月一九日「致広洽法師 五八」)。
- (14) 同上、二六一頁(一九六一年四月七日「致広洽法師 七四」)。
- (15) 朱幼蘭 中華民国期には上海の三井銀行にて会計職。建国後は上海私立孟賢中学総務主任を経て、上海第一五中学総務主任。浄土宗の居士(李圓浄と同じく、印光法師の弟子)で、法名は智開。
- (16) 『豊文集』第七巻、二四七・二五八頁(一九六〇年九月二〇日「致広洽法師 六〇」、一九六一年一月三〇日「致広洽法師 七〇」)。出版に関する費用はすべて、広洽法師がシンガポールで集めた募金で賄われたようである。
- (17) 広洽「護生画集」第四集序言「豊漫画全集」第一巻、一九九九年、四六七頁。
- (18) 『豊文集』第七巻、二四九頁(一九六〇年一〇月一七日「致広洽法師 六一」)。
- (19) 同上、二四八頁(一九六〇年九月二三日「致広洽法師 六一」)。
- (20) 豊子愷「護生画集」第五集序言「豊漫画全集」第一巻、一九九九年、四六六頁。
- (21) 沈慶均等編『護生画集』中国友誼出版公司、一九九九年、四四二―四四三頁。
- (22) 同上、五〇六―五〇七頁。
- (23) 前掲、豊子愷「護生画集」第五集序言、四六六頁。
- (24) 虞愚 原名は徳元、字は竹園、号は北山。原籍は浙江山陰(現紹興)で、福建省廈門生まれ。南京支那内学院に学び、卒業後は廈門大学教育学院心理学系に学ぶ。一九四三年より廈門大学哲学文学専業副教授、教授。一九五六年から中国仏学院教授。一九八二年より中国社会科学院哲学研究所研究員。その他に中国仏教協会常務理事、中国書法協会理事などを歴任。
- (25) 豊子愷が一九六二年に第三回全国政治協商会議第三次会議で北京を訪れた際、当時中国の仏教教育の中心的存在であった中国仏学院教授の虞愚が豊子愷を訪問し、中国国内では流通していない『護生画集』第四集の送付を依頼したことで交際が始まった。第五集についても、虞愚は豊に事前の作成を勧め、また題詞の執筆を志願した。虞愚は後に中国書法協会理事に任命されるなど、書に優れていたが、その書法は廈門時代に弘一法師の指導を受けたものである。『豊文集』第七巻、二八四・三一三―三一四頁(一九六二年四月三一日「致広洽法師(九八・一九六四年九月一日「致広洽法師 一三二」)。陳星・趙長春編著『弘一大師影集』

山東画報出版社、二〇〇〇年、一一〇頁。

- (26) 『豊文集』第七卷、三三二頁（一九六五年六月八日「致広洽法師 一四九」）。
- (27) 同上、三三三頁（一九六五年七月二日「致広洽法師 一五一」）。
- (28) 同上、三三五頁（一九六五年九月七日「致広洽法師 一五四」）。
- (29) 同上、三四一頁（一九六六年二月一日「致広洽法師 一六一」）。
- (30) 同上、三四一―三四二頁（一九六四年九月一日、九月 五日「致広洽法師 一三三・一三三」）。
- (31) 同上、三四四頁（一九六六年五月六日「致広洽法師 一六四」）。
- (32) 『豊文集』第六卷、六二九―六三二頁。
- (33) 同上、六二五―六二八頁。羅洪「懷憶豊子愷」、前掲、鐘桂松等編『写意豊子愷』二四四―二四六頁。
- (34) 同上、六二五・六二八頁。
- (35) 前掲、沈慶均等編『護生画集』六九八―六九九頁。
- (36) 同上、七〇〇―七〇一頁。仏教では、迷いの海を乗り越えて、悟りの彼岸へと達せしめる貴い筏という意味で、しばしば「仏法」を「宝筏」と称する。
- (37) 同上、七〇二―七〇三頁。
- (38) 澤田多喜男・溝口雄三「仁」、溝口雄三等編『中国思想文化事典』東京大学出版会、二〇〇一年、一〇〇―一〇一頁。
- (39) 豊子愷の名譽が完全に回復するのは一九七八年六月のことで、翌年六月に上海市文化局、文連、画院により遺骨安置儀式が執り行われた。前掲、豊一吟他『豊子愷伝』二一四―二二五頁。
- (40) 豊一吟『護生画集』後記」、前掲、沈慶均等編『護生画集』九〇五頁。
- (41) 一九五八年以降、全国規模で実施された。一九五八年当時、「四害」は蚊、蠅、鼠、雀であったが、一九六〇年に雀はトコジラミに替わった。豊子愷の原文では、「四害」は蚊、蠅、鼠、ゴキブリとなっている。『護生画集』には「護心思想」の観点から、当時「四害」とされた生物の殺傷に批判的とも思われる作品が複数含まれていた。

- (42) 『豊文集』第七巻、三四一頁（一九六六年二月一四日「致広洽法師 一六一」）。
- (43) 前掲、末木文美士・曹章祺『現代中国の仏教』四六頁。
- (44) Cheng, Nien. *Life and Death in Shanghai* (Harper Collins Publishers) 1993, p. 362.
- (45) 『護生画集』第四集の書写を担当した朱幼蘭も、それが原因で犯罪者の扱いを受けるに至った。『豊漫画全集』第八巻、二〇〇一年、七二頁。
- (46) 『豊文集』第七巻、三四六頁（一九六六年一〇月二日「致広洽法師 一六六」）。
- (47) 『豊漫画全集』第八巻、二〇〇一年、七二頁。
- (48) 前掲、豊一吟他『豊子愷伝』、一六三―一六五頁。
- (49) これらはいずれも「放毒罪行」として、文革初期に大字報で指摘されたものである。『豊文集』第七巻、六三三頁（一九七一年七月三日「致豊新枚、沈綸 四」）
- (50) Barne, Geremie. *An Artistic Exile: A Life of Feng Zikai* (1898-1975) (Univ. of California Press) 2002, p.330.
- (51) 『豊文集』第七巻、八四五―八四七頁。
- (52) 前掲、方堅「風雨憶故人 豊子愷先生在 文革 中」二二〇頁。
- (53) 潘文彦「豊子愷先生の胡須」、前掲、鍾桂松等編『写意豊子愷』一三〇頁。
- (54) 豊一吟、「回憶我的父親豊子愷」、同上、鍾桂松等編『写意豊子愷』三〇一―三〇三頁。
- (55) 前掲、豊一吟他『豊子愷伝』一六五―一六六頁。
- (56) 『縁縁堂統筆』は、一九七三年執筆当時は『往時瑣記』という題名であったが、同年に『統縁縁堂隨筆』と改名し、最終的には『縁縁堂統筆』となった。『豊文集』第六巻、六五三―七七〇頁。
- (57) 『豊漫画全集』二〇〇一年、第八巻、一八八頁。
- (58) 同上、第八巻、一〇八頁。
- (59) 『大乘起信論』は馬鳴菩薩（アシュバゴーシヤ）の作と伝えられるが、同書には漢訳がなく、梵文原典も西蔵訳も存在しない。

- い。著者の馬鳴を「仏所行讚」の著者の馬鳴菩薩とする説は、今日ではほとんど否定されている。同名異人の馬鳴とするなどのインド撰述説と、中国国内で作られたとする説があり、確定的結論はでない。論が簡明整然であるため、中国および日本で盛んに学習された。総合仏教大辞典編集委員会『総合仏教大辞典』法蔵館、一九八七年、九三〇頁。
- (60) 『豊文集』第七卷、六三〇頁（一九七一年六月二七日）致豊新校、沈綸 九二二。
- (61) 同上、六三〇・六三一・六三四頁（一九七一年六月二七日・六月二八日・七月一三日）致豊新校、沈綸 九二・九三・九六。
- (62) 同上、三五〇頁（一九七一年一月二日）致広洽法師 一七一。
- (63) 周穎南「豊子愷与周穎南的通信」『新文学史料』一九九八年第四期、一九九八年一月、八三頁。
- (64) 正確な審査結論は「反動學術権威と扱わず、情状酌量の上、生活費を発給する」であったが、自由を渴望する豊にとつてそれは「解放」を意味していた。『豊文集』第七卷、六六三頁（一九七二年二月三〇日）致豊新校、沈綸 二二九。
- (65) 同上、三五五・三五六頁（一九七三年八月二七日）致広洽法師 一八二。
- (66) 同上、三五八頁（一九七三年一月二日）致広洽法師 一八五。
- (67) 前掲、周穎南「豊子愷与周穎南的通信」八八頁。
- (68) 武内実編『中国近現代論争年表 下』同朋舎出版、一九九二年、七〇四頁。
- (69) 『豊文集』第七卷、六七八頁（一九七四年四月二四日）致豊新校、沈綸 一四二。
- (70) 巴金「懐念豊先生」『随想録』北京三連書店、一九八七年、三七〇・三七二頁。
- (71) 『豊文集』第七卷、六八四・六八五頁（一九七四年九月四日）致豊新校、沈綸 一四六。
- (72) 前掲、沈慶均等編『護生画集』六頁。
- (73) 前掲、巴金「懐念豊先生」三七〇頁。
- (74) 豊新校は一九六四年に天津大学を卒業した後、上海科学技術大学の配属となり、同校で日本語を修め、一九六六年に卒業した後は同校で教職に就く予定であった。しかし、豊子愷に連座して自宅待機の身となり、一九六八年に河北省石家庄の製薬工場に勞

働者として就職した。自分自身への批判や攻撃は一切意に介さなかった豊子愷にも、これは耐えがたく辛い出来事であった。

(75) 『豊文集』第七巻、八一―九頁。一九六七年二月に豊新枚は沈綸と結婚し、翌年四月に石家庄へ赴任した。妻の沈綸の配属先は天津であったため、二人は長期に渡り別居を余儀なくされた。

(76) 同上、八二〇頁。

(77) 同上、六五五―六五六頁（一九七二年八月四日「致豊新枚、沈綸 一一八」）。

(78) 同上、四四八頁（一九七一年八月二六日「致常君実」）。同上、六五五―六五六頁（一九七二年八月四日「致豊新枚、沈綸 一一八」）。

(79) 同上、六五二頁（一九七二年六月二日「致豊新枚、沈綸 一一五」）。

(80) 同上、六六八頁（一九七三年一月二三日「致豊新枚、沈綸 一三一」）。

本研究は科研費（基盤研究（C）23520419）「李叔同（弘一法師）をめぐる日中文化交流の研究 中国の近代化と日本」の助成を受けたものである。

— おおの きみか・法学部准教授 —